# 謎の砂鉄

## 出土地：牧港貝塚

今回は、牧港貝塚出土の砂鉄を紹介します。牧港貝塚は、浦添市の牧港に所在する沖縄貝塚時代後期（弥生 ~ 平安並行時代）からグスク時代の遺跡で、昭和 58（1983）年の発掘調査では砂鉄が出土しています。

砂鉄の産地として、日本では中国地方が有名ですが、南限は鹿児島県種子島・屋久島と考えられています。砂鉄の成分分析を実施したところ、鹿児島県や種子島の砂鉄成分に近似し、海底にある砂鉄が海流によって沖縄方面に打ち上げられた可能性も指摘されています。牧港貝塚では製鉄と関連する遺構や遺物などは見つかっていないため、製鉄との関連はわかっていません。類例として、北谷町の後兼久原（くしかねくばる）遺跡では、砂鉄を貯蔵した土坑が確認されています。

グスク時代の沖縄諸島および宮古・八重山地域では、鍛冶を中心とした鉄器生産技術があったことがわかっていますが、製鉄を示す遺構は確認されていません。

しかし、近年鹿児島県喜界（きかい）島において、南西諸島ではじめて製鉄関連の遺構や遺物が確認されています。城久（ぐすく）遺跡群大（おお）ウフ遺跡では、製鉄炉と鍛冶炉とともに砂鉄精錬滓（さてつせいれんさい）などの製鉄関連遺物が出土し、崩（くず）リ遺跡でも製鉄関連遺物として炉壁（ろがい）や鉄滓（てっさい）（炉外流出滓（りゅうしつさい））が出土し製鉄炉が存在した可能性が指摘されています。

グスク時代の南西諸島において、喜界島で生産された鉄器・材料鉄が南西諸島に広がったなどの想定もできますが、この時代の鉄の利用については不明な点も多く、今後の分析や研究が期待されます。

具志堅 清大